

1. 加賀市大聖寺地区と上福田の概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4999

1. 加賀市大聖寺地区と上福田の概要

鏡 味 治 也

- I. はじめに
- II. 歴史的背景
- III. 上福田：農村から住宅地へ
- IV. 大聖寺：城下町再生への模索
- V. おわりに

I. はじめに

金沢大学文学部文化人類学研究室では、2004（平成16）年度の調査実習を、加賀市大聖寺地区の上福田町（かみふくだまち）を中心とした地域を対象に実施した。本報告書はこの調査実習に参加した学部3年生と大学院修士1年生および教員が、基本的にはその際に得た資料にもとづき、それぞれの関心を持ったテーマについて分担執筆した各章から構成されており、当研究室の調査実習報告書としては20冊目のものとなる¹⁾。

これまでの当研究室の調査実習は、藩政時代の「村」に相当しその歴史伝統を継承する特定集落か、あるいは明治の町村合併によって成立した「村」の範囲に相当する現市町村内の特定地区を、調査対象として設定してきた。本年度も当初は加賀市大聖寺地区の上福田町を調査対象とすることでスタートしたが、もともと農村でありながら大聖寺の市街地に隣接するというこの集落の特異な立地から、上福田の中だけで聞き取りを進めていけばこの集落の独特の性格や近在での位置づけはじゅうぶん理解できないと判断し、途中から聞き取りの対象を隣接する町々や大聖寺地区全体で活動する団体にまで広げることにした。聞き取りに伺った範囲を町名で記せば、旧福田村（後述）地内の松島町、新旗陽町、下福田町、旧大聖寺町内の殿町、新組町、番場町、新町、新栄町、相生町、北片原町、福田町にまでおよぶ。これらはいずれも現在上福田町とともに加賀市大聖寺地区を構成する町区であるが、そのすべてを網羅するものでももちろんなく²⁾、あくまでも当初の調査対象である上福田町と歴史的につながりの深い町区へと聞き取りの範囲を広げていった結果としての選択であった。もともと大聖寺藩の城下町を中心とした大聖寺地区全体を調査対象にする用意はなく、

集め得た資料もその全体像を描き出すにはほど遠いと言わざるを得ない。大聖寺地区、とりわけ城下町の風情を残す大聖寺中心街の調査については、別の機会を待つことにしたい。

以上のような経緯から、ここでは上福田町の大聖寺地区内での位置づけやその歴史的背景を概略し、次章以下の各論の土台となる大枠を提供することにしたい。

II. 歴史的背景

石川県の南西端に位置する加賀市の行政の中心は、大聖寺藩 10 万石の城下町大聖寺に置かれている。大聖寺の町は、大聖寺城址のある小高い錦城山のふもとにかたまり、その北側を川幅 10 メートルほどの大聖寺川が流れている。上福田町はその川の北側、大聖寺の町から見れば川向こうに位置する。

中世にさかのぼれば、大聖寺川の北側（右岸）は福田荘と呼ばれ、流域の低地を水田に開拓した農業をおもな生業としてきた。いっぽう川の南側（左岸）は熊坂荘に属し、大聖寺の町はもともと白山五院のひとつ大聖寺の門前町として栄え、藩政時代には大聖寺藩の城下町となった。このように、大聖寺川をはさんで隣接する大聖寺と上福田は、その歴史的由来も生業も異なる別々の地域であったが、城下町の拡大につれて川の北側（つまり上福田の地内）にも下級武士や足軽の住居が建つようになり、市街地に文字どおり隣接するという状況は江戸時代にすでに始まっていた³⁾。

明治になって藩政が終わりを告げ、1889（明治 22）年の町村合併で上福田は下福田ほかの 8 か村とともに福田村を構成した。村役場や小学校は上福田の地内に置かれ、上福田は福田村の行政の中心となった。しかしその役場や小学校は、大聖寺の町から見れば市街地の縁にたてられたことになり、農村でありながら市街地に隣接するという上福田の性格は変わらなかった⁴⁾。いっぽう大聖寺は同時期の町村合併で大聖寺町となり、福田村とは別の自治体として出発した。

昭和に入ると、上福田に大きく関わるふたつの出来事が起こった。ひとつは大聖寺川の改修工事であり、もうひとつは福田村の大聖寺町への合併である。

大聖寺近辺の低地を蛇行して流れる大聖寺川は、傾斜が緩いこともあってたびたび洪水を引き起こし、大聖寺の町はその水害に苦しんだ。そこで 1933（昭和 8）年から上福田の集落の北側に放水路として新川が掘削された。旧川にもいぜん水は流れ続け、その川によって大聖寺と上福田が隔てられる状況に変わりはないが、上福田の水田のかなりの部分が新川の用地に供され、また残った水田の大部分が新川によって集落から隔てられることになった。

1935（昭和 10）年には上福田を含む福田村が大聖寺町に合併された。上福田地内に置かれていた村役場や小学校は閉じられ、学童は大聖寺町内の錦城山のふもとにある錦城小学校に通うようにな

り、福田村の中心としての上福田の役割りは終わりを告げた。

戦後の1958（昭和33）年には、大聖寺町を含む近隣の5町4村が合併して加賀市となり、上福田もその一部となった。市役所は大聖寺町内に置かれ、大聖寺は加賀市の行政の中心となった。

また大聖寺川は新川掘削後もまだ洪水がやまなかったが、1966（昭和41）年には上流に我谷ダムが造られ、また同年から新川の拡幅工事が行われて、ようやく大聖寺の町は頻繁な水害被害から脱することができた。ただ、それによって上福田の水田はさらに削られ、集落からますます隔てられることになった。新川の北側には大きな工場や新興住宅地が建てられて朝日町という別の町区を構成するようになり、水田面積の減少に拍車をかけている。

新川と旧川にはさまれた上福田集落のまわりにわずかに残された水田も宅地開発が進み、現在では新川の南側は大聖寺町とひと続きの市街地のような様相を呈している。大聖寺の古い町並みと旧川をはさんで接し、また水田とは新川で隔てられている上福田集落の現在の景観が、そのまま上福田という町でも純農村でもない集落の性格を象徴しているようだ。

III. 上福田：農村から住宅地へ

大聖寺の町中から旧大聖寺川を越えて上福田に行くには、福田町を北に上がったところに懸かる福田橋を渡るのが、昔も今も主要路である。福田町を南北に貫く通りは、道幅は狭いが戦前から戦後の三八豪雪の頃までは大聖寺随一の商店街で、呉服屋、雑貨屋、金物屋、鍛冶屋、履物屋、菓子屋、八百屋、肉屋から薬屋や医者などが軒を連ね、にぎわっていたという。

福田橋を渡り上福田の地内に入って、新川のたもとまでさらに商店街は続く。ここは新町商店街と呼ばれ、昭和に入ってぽつぽつと店が作られ、戦後になって店屋が並ぶようになった新しい商店街である。

上福田の集落は、この新町商店街から西へ折れ、鎮守の杜である春日神社までの参道沿いに並ぶ家並みが、もともとの旧家である。この参道に入ると、商店街の町家造りとは違い、母屋と納屋に庭を配した、農家の面影を残す家が続く。その風情はまた、参道の一本南側の北片原町や新旗陽町、あるいは殿町新組町の建て込んだ家並みとも異なっている。ただ現在では、かつての庭に新宅や工場や車庫が建てられ、商店街や住宅地との区別はつきにくくなっている。そして参道の北側から新川の堤にかけても、わずかに残された水田をつぶして次々と新しい住宅が建てられ、旧大聖寺川と新川にはさまれた一帯がひとつながりの住宅地になりつつある。

上福田の領地は、旧大聖寺川の北側、春日神社参道沿いの旧家を中心とする居住区から、新川の北側に広がる水田、そしてそのさらに北に位置する畑山の一部までを含む。この畑山にかつては上

福田の火葬場（サンマイ）があり、墓地があった。ただし集落の南側の馬場町や殿町新組町は藩政時代から下級武士や足軽の居住地となり、また福田橋近辺の北片原町、新町、相生町、松が根町などには商家が進出するなどして、漸次大聖寺町の一部として組み入れられていった。

江戸時代末期（1844年）に編纂、完成された「江沼志稿」には、当時の上福田村について、村高901石余（本田881石、新田20石）、山役64匁5分、家数43、人口287等と記されており、たしかに農村であったことがうかがえる。

明治になって福田村成立以後、村役場や小学校が置かれ、また大聖寺に近いこともあって勤め人も増加したが、そのいっぽうで大聖寺町の羽二重生産が盛んだった頃は、上福田でも桑の生産や養蚕業が盛んだったという。絹織物業は昭和10（1935）年頃を境に衰退したが、かわって製糸や縫製などの織物業が盛んになり、上福田地内でも数軒の工場が1980（昭和55）年代まで稼働していた。

上福田は繁華な商店街に隣接していたこともあって、店屋は金物店と米屋があるくらいである。製造業も織物や紙製品の家内工場のほかは、土建業や造園業といったところで、農村によく見られる生業構造を示している。

明治以降の上福田の世帯数・人口の変遷を表1に示す。福田村が大聖寺町に合併してから第二次世界大戦をはさんで加賀市成立までの、行政区分が変転した時期の推移がわからないが、明治から大正にかけて世帯数・人口とも漸減したこと、高度経済成長期の1965（昭和40）年からバブル経済期の1985（昭和60）年までは世帯数・人口とも安定し、その後バブル崩壊後の1995（平成7）年までに世帯数は変わらないものの人口がいったん減少したのが、最近の10年で世帯数・人口とも急増に転じていることが読み取れる。

表1 上福田の世帯数・人口動態

	1889	1920	1965	1975	1985	1995	2000	2003
世帯数	73	53	87	87	84	84	101	127
人口	298	243	342	359	360	290	336	430

1889/1920年の数値は『角川日本地名大辞典・石川県』より、以後の数値は国勢調査にもとづく『市町村地区別人口および世帯の概数』より、2003年は加賀市役所住民課の資料より

近年の世帯数・人口の急増が、おもに宅地開発による移入者の増加に起因することは容易に推測されるが、市街地に隣接するという立地条件から、上福田への移入者の増加は必ずしも近年に限ったことではない（詳しくは2章参照）。

集落としての重要な変化は、世帯数が安定もしくは増加しているにもかかわらず、農家の数が急減していることである。1960（昭和35）年の時点ですでに上福田の農家数はわずか19戸であった。それが1970（昭和45）年に14戸、80年で8戸と、20年の間に半減している。1990（平成2）年

には9戸、95年には8戸と、その後は80年の戸数を維持しているが、そのほとんどが2種兼業農家になっている。上福田の農村としての実態はほとんど失われかけていると言っても過言ではないだろう。

農村でありながら市街地に隣接する上福田は、江戸時代からすでにその周縁部が市街地にのみ込まれていく歴史をたどってきた。今や宅地は旧集落の北側にも広がり、旧集落の内部ですらも農家から勤め人の住宅への転換が進みつつある。

IV. 大聖寺：城下町再生への模索

大聖寺の古い町並みは、その頂に城があったとされる小高い錦城山の東側にかたまっている。藩邸があった山のふもとの一画は錦城小学校となり、その東には車がすれ違うのも難しい狭い通りが碁盤の目のように走る。京町や福田町などともとも町人の集まった通りには、今ではそこかしこで歯が抜けたようになってはいるものの、間口が狭く奥行きが深い古い町家の家並みが続く。大聖寺川のほとりに建てられた藩主の休憩所長流亭（重要文化財指定）や山ノ下の寺院群など、金沢と並ぶ武家文化、町人文化の中心であったことをしのばせる風情を今に残している。

明治以降も昭和の10（1935）年頃までは、藩政時代の武家の女人の内職に端を発するとされる羽二重織りを中心とする絹織物産業で町は潤った。ここで織られた大聖寺羽二重は京都へ出荷されて友禅染めに加工されるなど、おもに国内市場で需要が高かった。夜遅くまで町中に機の音の絶えることがなかったと懐古される時代である。しかし戦時色が強まる中で贅沢品であった絹織物の生産はしだいに衰退していった。

しかし絹以外の材料を使った燃糸、織物、染色、縫製などの織物産業は、その後も大聖寺を中心とした一帯の基幹産業であり続け、慢性的繊維不況となる1980（昭和55）年代までは活況を呈していた。

織物業と並んで戦後の産業の主力となったのは、チェーン製造の大同工業をはじめとする製造業である。大聖寺に限らず加賀市一円で操業する機械製品の工場は、大聖寺を含んで1958（昭和33）年に成立した加賀市の基幹産業に成長した。

加賀市の産業としてはこのほかに、山代と片山津の温泉業があげられる。これらの温泉地はバブル経済が進展する1980（昭和55）年代まで来客数を伸ばし続け、加賀市の財政を支える重要な支柱となった。

こうしたなかで大聖寺は、産業のみならず商業の中心としての地位をもしだいに他の地域に奪われていくことになる。1970（昭和45）年代から始まる自家用車の普及と大型ショッピングセンター

の進出により、大聖寺内の古い商店街はしだいに衰退していくことになった。

明治以降の大聖寺の世帯数・人口の動態を表2に示す。1935（昭和10）年に人口が急増しているのは、その前に福田村との合併があったからで、以後の世帯数・人口はともに上福田を含む旧福田村のそれを含めたものである。これは現加賀市の行政においては大聖寺地区としてまとめられている単位である。

表2 大聖寺の世帯数・人口動態

	1889	1920	1935	1953	1965	1975	1985	1995
世帯数	2,079	1,933	-	3,212	3,569	3,979	3,994	3,847
人口	9,154	8,601	13,118	13,873	14,573	14,860	14,264	12,443

1889/1920/1935/1953年の数値は『角川日本地名大辞典・石川県』より、以後の数値は国勢調査にもとづく『市町村地区別人口および世帯の概数』より、2003年は加賀市役所住民課の資料より

表を見ると、明治から大正にかけては世帯数、人口ともほぼ横ばいの状態が続いたことがわかる。戦後になって、世帯数は1953（昭和28）年から1975（昭和50）年にかけて増加し、その後はほぼ横ばいの状態が続いている。いっぽう人口は、やはり1953年（昭和28）から1975（昭和50）年にかけて増加したがその後減少に転じ、とくに1975（昭和50）年から2000（平成12）年にかけての減少が目立つ。それらを合わせると、大幅な人口の流出入がないまま世帯規模の縮小が進行していることがわかる。三世代家族のうちの若夫婦が域内に転居し新宅を構えることで、世帯数の減少を埋めあわせているのが実態ではないかと推測される⁵⁾。

1970（昭和50）年代以降の人口の減少は、大聖寺の町が産業や商業の中心の座を失いつつあることと連動したものであることは疑えない。こうしたなかで、大聖寺の町の活気を取り戻そうとする住民の活動が活発に見られるようになっている。詳しくは後の章で論じるが、こうした活動はひとつは町区の区長たちで構成する大聖寺地区まちづくり推進協議会を中心とするさまざまな催しを通して、もうひとつは大聖寺地区内の名所旧跡や美術館といった観光地の整備と観光の促進を目指す活動を通して展開されている。

まちづくりでも観光促進でも、キーワードとなっているのは「歴史」や「伝統」であり、とりわけお茶や茶道具、お囃子や謡曲といった町人文化にまつわる催しの多いことが目を引く。まちづくり推進協議会主催の「大聖寺歴史ウォーク」では町内の旧跡を巡り、地区会館で10月に催される「文化の祭典」では、住民有志の作る大聖寺文化協会が町民の所蔵する茶道具などを展示する「我が家の家宝展」を開催する。町内の種々の催しには、謡曲や詩吟の愛好家グループが参加して花を添え、そうした習い事は錦城小学校の課外授業である「錦小ふるさと塾」にも取り入れられている。そして1997（平成9）年に石川県と加賀市が出資して大聖寺の町外れに建設された石川県九谷焼美術館

は、大聖寺藩が興しその後大聖寺の地場産業のひとつとなった九谷焼の焼き物を展示している。大聖寺を舞台とした観光の促進は、温泉地の観光客が減少している加賀市にとっての産業振興政策のひとつという側面もあることは事実だが、そこには大聖寺住民の町人文化を核とした城下町再興への思いが込められ、それがまちづくり事業にもさまざまなかたちで反映されていることも見逃せない。

ただ、こうした動きは旧大聖寺町内の人びとを中心に進められており、それが上福田のようにあとから大聖寺地区に組み入れられた人びとにとって多少縁遠いものであることも事実である。ここにもまた、大聖寺地区内での上福田の微妙な位置づけを見て取ることができる。

V. おわりに

以上、今年度の実習調査の対象とした上福田とそれを取り巻く大聖寺の歴史的背景とそれぞれの特色を概述した。以下の各章では上福田あるいはそれを含む大聖寺全体を対象とした特定のテーマについて、各報告者が集め得た資料をもとに論じる。例年のことながら本報告書でも執筆者個々にテーマ設定をまかせているので、全体として対象とした集落や地区に関する網羅的な構成をとっていない。その記述にも分析にも不正確、不十分な点が少なくないと思われる。関係者各位の忌憚のないご批判、ご叱正をお願いする次第である。

注

- 1) 既刊の調査実習報告書の一覧は、巻末の「参考文献・参考資料」に掲げておいた。
- 2) 大聖寺地区は78の町区からなり、そのそれぞれに区長を置いて自治会活動の単位としている。
- 3) 大聖寺川北岸で、川と上福田集落の間を占める殿町、新組町、番場町はそうした武士や足輕の屋敷があった町区という。
- 4) 現在の新旗陽町が、福田村の小学校だった旗陽小学校の跡地である。その跡地に戦後建てられた市営住宅が、現在の新旗陽町のもとになっている。
- 5) 上福田に近年建てられている新宅の多くが大聖寺の町中から移ってきた人のものであると聞いた。